平成30年度　第69回夏休み良書推薦運動

読書感想文コンクール表彰式

平成30年 10月 6日(土)
サンセール盛岡

主催　岩手県良書推進協議会
協賛　岩手県学校生活協同組合
後援　岩手県小学校長会
　　岩手県学校図書館協議会
　　岩手県ＰＴＡ連合会

式次第

一　開式のことば
二　主催者あいさつ
三　賞状並びに記念品授与
四　審査報告
五　来賓祝辞
六　作品朗読
　　宮古市立山口小学校　三年　小野寺　朝　妃
七　感想発表
　　宮古市立田老第三小学校　一年　舘　崎　央　奈
八　閉式のことば

審査員

大石善弘先生
近藤澄江先生
齋藤英明先生
畠山明美先生
藤村由美先生
田代五月先生
大渕奈実先生
永井臣之介先生
杉浦美香子先生

平成30年度　第69回
夏休み良書推薦運動読書感想文コンクール
入賞者名簿

『　』は図書名

〈最優秀賞〉

ミルクへ　『おたんじょうび、もらったの』
宮古市立田老第三小学校　一年　舘崎央奈

ピクルスとわたし　『ピクルスとふたごのいもうと』
宮古市立山口小学校　二年　中澤一花

伝えるど力　『拝啓、お母さん』
宮古市立山口小学校　三年　小野寺朝妃

ココモモの魔法の秘密　『妖精のあんパン』
宮古市立田老第三小学校　四年　舘崎百奏

世界を救うパンの缶詰　『世界を救うパンの缶詰』
宮古市立田老第三小学校　五年　佐々木大吾

自分のミッション　『世界を救うパンの缶詰』
滝沢市立鵜飼小学校　六年　赤坂祐生

〈岩手県小学校長会長賞〉

やさしい心で　『ひみつのきもちぎんこう』
宮古市立山口小学校　二年　佐々木結菜

おかしなおひめさまと名なしのま女　『6人のお姫さま』
盛岡市立桜城小学校　三年　山田樺音

あきらめなければ失敗じゃない　『世界を救うパンの缶詰』
宮古市立山口小学校　六年　小野寺彩仁

〈岩手県学校図書館協議会長賞〉

海の小さなメッセンジャー　『ダンゴウオの海』
軽米町立晴山小学校　二年　古舘透和

かあちゃん取扱説明書を読んで　『かあちゃん取扱説明書』
北上市立黒沢尻北小学校　四年　高橋尚生

有言実行するには　『世界を救うパンの缶詰』
宮古市立山口小学校　五年　佐藤心音

〈岩手県ＰＴＡ連合会長賞〉

ひみつのきもちぎんこう　『ひみつのきもちぎんこう』
大船渡市立盛小学校　一年　佐藤　真帆

さくらの時間が止まったらいいな『マンガでおぼえる百人一首』
北上市立黒沢尻東小学校　三年　渡邊　未来

あきらめなければ失敗ではない　『世界を救うパンの缶詰』
北上市立黒沢尻西小学校　六年　豊巻　心路

〈優秀賞〉

ひみつのきもちぎんこう　『ひみつのきもちぎんこう』
大船渡市立盛小学校　一年　畠山　莉緒

ジャラーン!!　『ひみつのきもちぎんこう』
宮古市立田老第三小学校　二年　畠山　芽依

言葉の海の真ん中で　『拝啓、お母さん』
宮古市立山口小学校　三年　箱石　香乃

かあちゃん取扱説明書を読んで　『かあちゃん取扱説明書』
北上市立黒沢尻北小学校　四年　川東　さき

とりあえず挑戦しょう　『糸子の体重計』
宮古市立山口小学校　五年　川戸　綾乃

あたたかい涙とかなしい涙　『5分後に思わず涙。青い星の小さな出来事』
花巻市立宮野目小学校　六年　小川　日菜子

〈入選〉

たんじょうびをもっとすてきに　『おたんじょうび、もらったの』
宮古市立山口小学校　一年　花坂明香

つなみで生きのこったダンゴウオ『ダンゴウオの海』
久慈市立宇部小学校　二年　滝澤啓光

ぼくの「かあちゃん取扱説明書」『かあちゃん取扱説明書』
北上市立黒沢尻西小学校　三年　豊巻慶

後悔はだれにでもある　『拝啓、お母さん』
盛岡市立城南小学校　四年　佐々木りな

戦争と幸せ　『わたしがいどんだ戦い1939年』
宮古市立山口小学校　五年　船越結衣

みんなのために　『世界を救うパンの缶詰』
大船渡市立日頃市小学校　六年　船野大地

〈学校賞〉

宮古市立田老第三小学校

〈学級賞〉

・宮古市立田老第三小学校　5・6年
・大船渡市立日頃市小学校　2年
・大船渡市立日頃市小学校　6年

〈佳作〉

ちいさいしろくんへ　『くろくんとちいさいしろくん』
盛岡市立土淵小学校　一年　八重樫　翔

おたんじょうび、もらったの　『おたんじょうび、もらったの』
北上市立黒沢尻北小学校　二年　林　太一

よしだけかぞくつうちょうできました。『ひみつのきもちぎんこう』
花巻市立宮野目小学校　二年　吉田　景都

海の生きものは、つよいな　『ダンゴウオの海』
陸前高田市立小友小学校　二年　村上　隼太朗

本当の友だちって？　『しりとりボクシング』
宮古市立山口小学校　三年　花坂　明咲

きくちだがしや　『きくち駄菓子屋』
北上市立黒沢尻北小学校　四年　髙坂　結衣

心のい場所　『きくち駄菓子屋』
宮古市立千徳小学校　四年　星野　有沙

ジンクスをかき消す強いきずな　『キミに会えてよかった』
滝沢市立滝沢第二小学校　五年　新沼　奎華

エイダが戦ったものとは　『わたしがいどんだ戦い１９３９年』
宮古市立田老第三小学校　六年　畠山　大輝

未来への百回の挑戦　『世界を救うパンの缶詰』
盛岡市立高松小学校　六年　伏原　慶

一年　最優秀賞

ミルクへ

宮古市立田老第三小学校　一年
たてざき　ちかな

たんじょう日っていったら、とってもうれしい日。だってプレゼントがもらえるし、ケーキだってつくってもらえる。ほかにも、たくさんのごちそうをつくってもらえる日なんだよ。だから一年の中では一ばんすきな日。

そんなうれしくてたのしい日がミルクにはなかったんだね。ミルクにたんじょう日がないってしったとき、わたしはミルクがすごくかわいそうにおもえたよ。そして、たんじょう日のないミルクに、おばあちゃんがじぶんのたんじょう日をくれたよね。じぶんのたんじょう日ができたから、よろこぶかなっておもってたら、ミルクはないちゃってたよね。それはおばあちゃんをおいわいしてあげる日がなくなったから。ミルクってほんとうにやさしくてすてきな子なんだね。

そうそう、わたしがミルクやハルちゃんかぞくにおしえてもらったことがあるんだ。それはね、ハルちゃんのたんじょう日は、おとうさんとおかあさんがはじめておとうさんとおかあさんになった日だってこと。つまり、わたしのたんじょう日は、わたしのおねえちゃんがはじめておねえちゃんになった日だってことだし、おにいちゃんは二人のいもうとのおにいちゃんになったってこと。そう、わたしのたんじょう日は、かぞくがはじめて七人になった「わたしのかぞくのたんじょう日」だったんだってわかったよ。

まい日いっしょにいると、けんかもあってたのしいことばかりじゃないけど、わたしにとってかぞくは一ばんのたからもの。きっとミルクにとってもおなじだよね。これから、かぞくのたんじょう日をおいわいするたびに「わたしのかぞくでいてくれて、ありがとう」っていうかんしゃのきもちをこめながら、プレゼントをあげたり、ごちそうをたべたりしたいなっておもったよ。ミルク、とってもたいせつなこと、おしえてくれてありがとう。

（図書名『おたんじょうび、もらったの』）

〈講　評〉

央奈さんはミルクにお手紙を書くようにして感想文を書いています。ミルクといっしょにかなしんだりよろこんだりしながら読んだことがつたわってきました。

だから、ミルクやはるちゃんから「じぶんのたんじょう日が、かぞくのたんじょう日でもあるんだ。」というすてきなことをおしえてもらうことができましたね。ミルクの本とであって、央奈さんの家のたんじょう会は、今までいじょうにすてきな会になることでしょうね。

二年　最優秀賞

ピクルスとわたし

宮古市立山口小学校　二年
中澤一花

わたしには、いもうととおとうとがいます。いもうとは、四さいで、やさしくてかわいいけど、おこるとこわいです。おとうとは、二さいできげんがわるくなると、すぐにわたしにばかと言ってきます。二人とも、まだ小さいのでわたしはがまんしなければいけないことがたくさんあります。本とうはしたくないけれど、いもうとやおとうとがやりたいあそびをいっしょにやってあげなければいけません。だから、ふたごのいもうとのおにいさんになったピクルスはわたしとにているところがたくさんあるなと思いました。

わたしが一ばんこころにのこったばめんは、ムギとコムギがないた時に、ピクルスがミルクをもってきたり、だっこをしてあやしてあげたりしたところです。ピクルスのほうがたいへんで、ずっとなきたい気もちなのに、がまんしていてえらいなと思いました。

わたしもないているおとうとをだっこしてあげたことがあります。だっこしているうちに、なきやみました。おかあさんにもありがとうといわれて、とてもうれしかったです。

いもうとやおとうとが生まれて、たのしかったこともたくさんあるけれど、少しかなしかったこともあります。それは、おかあさんがいもうととおとうとばかりだっこしていて、おかあさんをとられてしまった気もちになったことです。その時、わたしはおかあさんに

「わたしもだっこして。」

とおねがいしました。おかあさんがだっこしてくれてほっとした気もちになり、思わずえがおになっていました。

思い出してみると、おかあさんにあまえているいもうととおとうとはいつもにっこりしています。おねえさんは、がまんしなければいけないことも多いけれど、いもうととおとうとのえがおのためにおてつだいやおせわをこれからもがんばりたいと思いました。

（図書名『ピクルスとふたごのいもうと』）

〈講　評〉

一花さんもピクルスも、妹や弟のためにがんばっているところが同じですね。題名にも文章にも「おなじだね。」の気もちがあふれています。

だから、これからは、お姉さんとしてうれしい時やちょっとさみしい時があっても「ピクルスと一しょ。」と思うことができて力がわいてくるかもしれません。そして、弟や妹の笑顔のためにがんばろうと思えるはずです。

一花さんの原こうはとてもきれいでした。一文字一文字に心をこめて書き上げた作ひんだなと感心しながら読みました。

三年　最優秀賞

伝えるど力

宮古市立山口小学校　三年
小野寺朝妃

わたしは、「活ぱんいんさつ」をはじめて知りました。活ぱんいんさつは、手仕事なので時間がかかるけれど、そのかわり一字一字に心がこもっています。それに凹凸があり、文字からあたたかさをかんじられる良さがあります。この活ぱんいんさつで、ゆなはお母さんとお父さんに自分の本当の気持ちを伝えることができました。わたしはこの本を読んで、「言葉で伝えること」について考えました。

ゆなは、お母さんのため、赤ちゃんのためにいろいろがまんしてきました。それなのに、一人で九州に行くことになって、思わず、

「わたし、もう妹なんかいらない。」

とひどい言葉を口走ってしまいました。本当はそういうつもりではなかったと思います。九州のじいじとばあばと生活していくうちに、ゆなは自分の後かいに気づきました。そこで活ぱんいんさつで、はがきを送ることにしました。ゆなは原こうを何回も書き直しました。ひどい言葉を言ってしまった後かいの穴ぼこに入れる、とても大切なはがきだから、一生けんめい考えたと思います。ゆなは活字をひろいながら、ぐちゃぐちゃの心をせい理し、本当の言葉、光る言葉をひろったと思えました。はがきを送った後、お母さんとお父さんからの返事が来て、ゆなの気持ちが伝わったことがわかり、本当にうれしかったと思います。活ぱんいんさつによって、ゆなながんばっていることや、妹が生まれるのを楽しみにしていることなど、直せつ言えなかった本当の言葉を伝えることができて、ゆなの後かいの穴ぼこをしっかりうめることができたと思いました。

言葉ははてしなくたくさんあります。言葉はいろいろな力をもっていることがわかりました。人をよろこばせる、楽しませる、元気づけるようなすてきな力。人をきずつける、せめる、かなしませるようなわるい力。たくさんの力があるからこそ、言葉は、伝える人が相手の人の気持ちを考え、えらんで使わなくてはいけないと思いました。

わたしは気持ちを言葉で表げんすることがにが手です。自分の気持ちの表し方がわからなくてだまってしまうことが多いです。そんなとき、だれかと話していくうちに自分の気持ちがせい理できてわかっていくことがあります。そのほかに、自分で気持ちがわかっていても伝えられない時があります。はずかしくてゆう気が出ません。「ごねんなさい。」や「ありがとう。」も言えないときがあります。言葉で伝えるのはむずかしいです。ゆなは伝えるど力をしました。わたしも伝えるど力をすれば、きっと言葉で表せるようになると思います。ゆながんばったように、わたしも自分からすなおに伝える、相手の気持ちを考える、伝え方を考えるというど力をしていきたいと思います。言葉について考え、自分の気持ちを表げんできるようになりたいです。

（図書名『拝啓、お母さん』）

〈講　評〉

人物の気持ちに寄り添って読み進めることができました。特に、主人公が活字を拾う場面は、それまでの気持ちの変化をていねいに読み取って豊かに想像しました。また、「言葉で伝えること」について自分の考えをしっかりまとめていることにも感心します。自分自身を見つめ、伝える努力をしたいと考えた朝妃さんの思いが素直な表現から伝わってきます。一冊の本との出会いを通して、大きな一歩を踏み出すことができました。

四年　最優秀賞

ココモモの魔法の秘密

宮古市立田老第三小学校　四年
舘崎百奏

私はあまり料理はしないけど、小麦が必死でパンを作っている様子から、パン作りはむずかしいってことが分かる。ホットケーキみたいに材料をまぜてやけばいいものではない。その日の気温や湿度によって、休ませる時間や材料の分量も変えなくちゃ美味しいパンにならないらしい。何度も失敗をくり返す小麦に「がんばれ」なんて声をかけてしまった私。だって、小麦が一生けんめいなのに、天然酵母の妖精ココモモが、まるで小麦の仕事のじゃまをするみたいにするから。それでも、小麦はめげたりしない。するとココモモの魔法みたいなものがはじけ飛ぶ。

妖精って言ったら、私の中では「自分の思い通りになるように魔法がかけられる人物」。でもココモモは自分の意志で魔法はかけられないようだ。ずいぶん変な妖精だなあって思ってた。そしたら、ある日、先生が私に

「パンはイースト菌を使って作るんだけど、天然酵母を使ったパンってすごく美味しいし体にいい。でも、酵母によって性格がちがうから扱いがむずかしいんだって。」

と教えてくれた。これで私はちょっと分かったことがある。それはココモモの魔法の秘密だ。ココモモは天然酵母の妖精。ココモモを見つけたのは小麦。だから、小麦がパン作りに集中しているとき、それもパン作りにぴったりな行動をしたときにだけ魔法が働くんだってこと。多分、魔法の秘密はそれだけじゃない。パンを作る人の心が酵母をはじめとする材料にしっかり向き合ったとき、そして食べてもらう人の方に心が向いたときじゃないと魔法はその力を発揮しない。その証拠に、小麦がうさぎあんぱんを作る場面では、気温や材料について注意をはらい、作業をすすめた。その必死さを感じ取ったココモモも生地の発酵具合がちょうどいいところで教えてくれた。それから、あんを包むのに失敗したって思った瞬間、ココモモの頭から取れた丸いものが道具に変わり、生地をカットすることでかわいいウサギ型になった。それは小麦が、〝風香ちゃんの笑顔がみたい。翔君に美味しいって言ってほしい。そしておじいちゃんに元気になってほしい〟と、食べてくれる相手のことを強く思う気持ちが妖精ココモモに力を与えたと思う。それはパン職人として働いていたおじいちゃんも同じだったと思う。だから、小麦が小さかったとき、パン作りをするおじいちゃんの肩にかすかに見えた黒い小さな何か、これも酵母の妖精で、美味しいパン作りの手伝いをしてくれていたと思う。

料理をすることは、自分の心をこめる行為であり、食べてくれる人がよろこんでくれたり、元気でいてくれたりすることをねがいながらすることなんだと、小麦から教わった。私も、小麦のようにはいかないとは思うけどこれから少しずつお家の人に教わりながら、料理の手伝いをしようかなと思った。

（図書名『妖精のあんパン』）

〈講　評〉

天然酵母の特徴を先生から教えていただいたことで、何度も何度も本を読み返し、ココモモの魔法の秘密について想像をふくらませたのではないでしょうか。次々と分かった魔法の秘密が短い文でテンポよく書かれていて、発見した喜びや感動がよく伝わってきます。食べてくれる相手のことを強く思う小麦の気持ちとおじいちゃんの思いの重なりにも気付いた百奏さんの料理は、心のこもったものとなり、家族を幸せにしてくれることでしょう。

五年　最優秀賞

世界を救うパンの缶詰

宮古市立田老第三小学校　五年
佐々木大吾（ささきだいご）

今ではスーパーやホームセンターで手軽に買うことが出来るようになったパンの缶詰。ぼくは、パンの缶詰を食べたことがなかったので、この夏休みに家族で買って食べてみた。缶を開けてみると、缶いっぱいにふくらんだパンが茶色い紙に包まれている。そしてあまいにおいがプーンとする。においだけで「美味しそうだ」というのが分かる。パンを包んだ紙はしっとりとしているが、パンもそれに負けじとしっとりしている。一口かじると、缶をあけたとき香るあまいにおいと同じものが口に広がる。やわらかくてうまい。これなら何個でもいけそうだ。決してお腹が空いているわけじゃないのにそう思えた。

このパンを世界で初めて作ったのは秋元義彦さん。パンっていうから、外国の人が発明したのかと思いきや、日本人。これを作ろうと思ったきっかけは阪神淡路大震災があったからだという。災害が起こると最初に必要になるのは食料だ。阪神の地震の時、秋元さんは二千個ものパンを焼き、被災地に送ったそうだが、そのほとんどが傷んでしまい捨てられてしまったというのだ。国語で職人さんの心意気について学習したが、やはり自分の作ったものは自分の分身そのもの。それが人の役に立ってこそ職人としての喜びがあるとぼくは思った。しかし、その多くが捨てられた。秋元さんには本当に辛いことだったと思う。

パンの缶詰は約二年で完成した。なんだ、結構早くできたじゃないか、そう思う人もいるだろう。でも、その日々は数えきれない失敗を重ねながらも、一刻も早く困っている人に美味しいものを届けたい、そんな秋元さんの職人としての意地と優しさが、パン缶の完成を早くさせた源だとぼくは考える。

そしてぼくが一番おどろいたのは、批判されたときの秋元さんの対応だ。ぼくならきっと、「はい、そうですか」と引き下がり、前には進もうとしない。だが秋元さんは「批判とは、改善できるということ」という考えのもと、それを解決しようと努力する。だから、リサイクルシステムのない外国でも、缶詰パンを支援として持って行けたり、若田光一さんが宇宙食として携帯したりできたのだ。

ぼくは学校の勉強だけでなく、秋元義彦さんからも職人魂というのを学ばせてもらった。解決したい問題から、決して目をそらすことなく正面からぶつかる。何百回の失敗にもへこたれず、様々な工夫を加えることで乗り越えていく。そして、その一生懸命さこそが、周りの人達を動かし、更には新たな仲間も増やしていくことができる、秋元さんの仕事ぶりを見ていて、ぼくはそんなふうに感じた。今までのぼくはいやだな、面倒だなと思うことから、少し逃げ過ぎていたように思う。全てが秋元さんのように、とはいかないが、様々な問題に対して、うまい答えは出せなくても逃げ出さず、しっかりと取り組んでみたい。

（図書名『世界を救うパンの缶詰』）

〈講　評〉

秋元さんの生き方や、仕事に対する姿勢（し）をよく理解し、共感しながら読んだことが伝わってきます。自分の経験から書き始め、お話の内容を紹介（しょうかい）しながら自分の思いや考えを述べ、最後に学んだことをまとめるという構成も上手です。秋元さんの生き方から学んだことは具体的に、たたみかけるように書かれてあり、強く訴（うった）えかける効果が生まれました。文章全体が、豊かだけれど飾（かざ）らない言葉で表現されており、大吾さんの素直な人柄（がら）が感じられる作品となりました。

六年　最優秀賞

自分のミッション

滝沢市立鵜飼小学校　六年
赤坂祐生

今までに、何度小さな疑問や違和感を見過ごしてきただろう。気づかないふりや気づいても解決しようとは全く思わなかった自分。しかし、その考えはパンの缶詰と秋元さん達のお客さんの声に対する行動を見て変わった。

この缶詰が作られるきっかけは、阪神淡路大震災だ。くわしくは知らないが、朝方におきて、今まで経験した事のない被害者が出たらしい。その時に、秋元さん達はパンを二千個作って被災地に送った。その後、秋元さんとお父さんの健二さんが試行さく誤して作ったパンの缶詰は日本だけではなく、米軍基地をはじめ世界中、そして宇宙食として、飛び立つことになる。

しかし、災害用の備蓄食として作りだされたパンの缶詰が賞味期限切れになると、産業はいき物となってしまうらしい。ぼくはいかりを覚えた。秋元さん達はぼく以上にくやしかったに違いない。社会は厳しいなと思った。

そんなパンの缶詰を無だにしないように始まった取り組みが〈救缶鳥プロジェクト〉だ。救缶鳥プロジェクトは、賞味期限が残り少ないパンの缶詰を世界各地に送るというものだ。このプロジェクトで世界に届けられたパンの缶詰は、二十一万六千六百三十八缶。秋元さんのみんなのために、パンの缶詰をリサイクルさせるというアイディアにおどろいた。

秋元さんの言葉で心に残ったのが二つある。

一つ目は、「あきらめなきゃ失敗ではない」という言葉だ。これは正しいとぼくは思う。人間は失敗をする生き物だからだ。その失敗のし方にもあきらめて終わりにしてしまう失敗と、あきらめずにまたチャレンジするという次につながる失敗があるとぼくは思う。

二つ目は「ミッション、パッション、アクション」という言葉だ。その中でも、ぼくに一番足りないのは、パッションだと思う。絶対にこれというものが無い。いつもどうでもいいわけではないのに、ついついどうでもいいと言ってしまう。それに比べ、秋元さん達は被災地から保存性があり、やわらかいパンを作ってほしいという難解なミッションに真っ向から立ち向かった。ぼくもこれからは、秋元さん達のようにパッションをもって行動していきたいと思う。

秋元さん達が行っている、ビジネスをしながら社会こうけんや社会問題を解決する事を〝ソーシャルビジネス〟という事を知った。小さい事だけれど、今のぼくにできる社会こうけんはパンの缶詰を二缶買う事だ。一缶はどんな味なのか一度は自分で食べてみたいし、もう一缶は誰かのために寄付したい。

世の中が良くなって来たのは、いろんな人が他の人の小さな疑問や違和感も見過ごさず、人の声を聞いて改善して来たからだ。ぼくも秋元さん達のようにいろんな人の声を聞いて、いろいろな事にチャレンジし続けて、自分のミッションを見つけたい。

（図書名『世界を救うパンの缶詰』）

〈講　評〉

文末表現の仕方が大変豊かなことに感心しました。「くやしかったに違いない」「正しいとぼくは思う」など、祐生さんの感じたことが力強い言葉で書かれており、見習いたい表現がたくさんありました。秋元さんの「あきらめなきゃ失敗ではない」という言葉を、さらに「次につながる失敗がある」という思いにまで深められたところが素晴らしいですね。祐生さんにもきっとミッションがあるはず。一生懸命打ち込めるものを見付けて、がんばる楽しさを感じてくださいね。

岩手県小学校長会長賞（低学年）

やさしい心で

宮古市立山口小学校　二年
佐々木結菜

「ひみつのきもちぎんこう」ってどんなぎんこうなのだろう。わたしは、一ばんはじめにそんなぎもんをもって、この本を読みすすめていきました。読んでみると、ひかるくんがしゅじんこうで、わるいことをすると青コインがたまり、いいことをするとピンクコインがたまっていくというお話だと分かりました。

わたしがこの本を読んで、一ばんこころにのこった場めんは、おかあさんがひかるが書いた紙を読んで、なみだをながしたところです。なぜかというと、おかあさんがひかるの本とうの気もちを知ることができた場めんだからです。おかあさんには、ひかるはただのらんぼうものに見えていました。でも、本とうの気もちとちがうことがかぞくにおこって、ひかるもくやしかったりかなしかったりしたことがおかあさんにつたわったからなみだがでたのかなと思いました。

わたしには、ひかると同じようなけいけんがあります。それは、ひかるがおとうとにゲームをかしてといわれたところです。わたしも、いもうとにゲームをかしてといわれたことがあります。わたしもゲームをやりたいのに、かしてと言われてイライラして、いもうととけんかになったこともありました。本とうはなかよくしたいのに、けんかになってしまって、わたしのこころにも青コインがたまってしまった気がしました。

わたしは、かぞくが大すきです。だから、かぞくつうちょうには、ピンクコインをいっぱいためたいと思っています。いもうとにひらがなを教えてあげたり、おとうさんやおかあさんのお手つだいをしたりして、やさしい心でピンクコインをたくさんためたいです。青コインをためてしまうこともあると思うけれど、その分いいことをたくさんして、かぞくがいつもえがおでいられるようにします。

（図書名『ひみつのきもちぎんこう』）

〈講　評〉

結菜さんが一番心にのこったところは、同じ本を読んだ人たちの感想文とはちょっとちがっていました。それは、お母さんがひかるの気もちを知った場面でした。心は目に見えなくて、つたわらないおもいがいっぱいあります。青コインの中にもだれかを困らせてでも伝えたい気もちがかくれています。そのことに気づくことができたのは、結菜さんにもつたわらなかった気もちがあったからですよね。しっかりと本を読んだことが伝わる作ひんでした。

岩手県小学校長会長賞（中学年）

おかしなおひめさまと名なしのま女

盛岡市立桜城小学校　三年
山田樺音

この本を見つけた時、わたしは、「どんなすてきなお話なんだろう。」とわくわくしました。「たぶんま女が出てきて、おひめさまにまほうをかけるんだ。」わたしは、そんな「白雪ひめ」や「シンデレラ」みたいなお話が大すきです。

でも、わたしが思っていたのとは、ぜんぜんちがっていました。いつも読んでいる本のおひめさまはすてきで、いい所だらけなのにこの本のおひめさまはかならずどこかに一つはこまった所があったのです。ゆうかんでかっこいい王子さまもいなくて、体が弱かったり名前が長かったりでした。だけど読んでいくとそこからどんどんおもしろくなっていきました。

一番面白かったのは、名なしのま女が一生けんめいアップルパイを売ってがんばっていたところです。一ど目に売ったときには、「もっと売りたい、お金がほしい、お金をためて自分もユーラ・ミミズレッテのようなバリ旅行をしてみたい。」と一つのこらずアップルパイを売り切ってしまいます。

本当は、いちばんうつくしいおひめさまをおそろしい死のねむりにつけるために作ったアップルパイです。そこでめんどうくさいけれどまたアップルパイをやいて売りに行きました。二ど目は飛ぶような売れゆきだったのです。

そこで、また、「もっと売りたい、お金がほしい、バリ旅行をしてみたい。」と思ったけれど「これはいちばんうつくしいおひめさまにさしあげるアップルパイだ。」となんとか思いとどまりました。だけど、ならんでいた人々が、「うつくしいひめだからといって、何のためにアップルパイをやろうというのだ。人間のかちは見た目の美しさではないだろうに。」と言うので、やっぱりさい後の一こを売ってしまいました。だから、仕方がありません。めんどうくさいけれども、もっと大へんな思いをして、アップルパイをまたまた作りました。

わたしもピアノのれん習で何どもやり直した事があります。どうひいたらいいかわからなくなり、れん習も発表会も少しいやだなと思いました。だから名なしのま女が、仕方なくだけれど何回もがんばったのは、本当にすごいと思います。

けっきょく名なしのま女の作せんはうまくいかなかったけれど、ふ公へいだとおしかけていった町の人たちのおかげでおしろがなくなってみんながはたらくようになったのは、よかったと思います。ねるのと食べるい外には毎日なんにもすることがなくて、ものすごくたいくつだったおひめさまたちはずっと生きてるかんじがするんじゃないかな。今まで知ってるお話のおひめさまとはぜんぜんちがうタイプのおひめさまだったけど、この本を読めてよかったと思いました。

（図書名『6人のお姫さま』）

〈講　評〉

知っているお姫様とぜんぜんちがう6人のお姫様の様子から、お話の世界に引き込まれていったのですね。名なしのま女がアップルパイを何度も作って売りに行く場面では、お話の展開のおもしろさにワクワクしながら読み進めたことが伝わってきます。ま女のがんばる気持ちは樺音さん自身の経験をもとに想像することができました。意外性や新しい発見によって心が動かされ、楽しみながら読んだことが伝わってくる感想文です。

岩手県小学校長会長賞（高学年）

あきらめなければ失敗じゃない

宮古市立山口小学校　六年
小野寺彩仁（おのでらあやと）

東日本大震災後、うちでは缶詰やレトルトパックなどの保存食、ペットボトルの水を置くようになった。しかし、パンの缶詰があるなんて知らなかった。缶詰といえば、魚、フルーツ、ビスケットなどが入っているイメージだ。やわらかいパンが缶詰に入っているなんて不思議な感じがした。この本を読み終えたとき、どうしてもこのパンを食べてみたくなり、買ってもらった。ふたを開けると、特しゅな紙に包まれたふわふわのパンが出てきた。いろいろな味があり、とてもおいしかった。この缶詰の賞味期限が三年もあることに驚いた。本に書いてある通りだった。そして、この缶詰が日本の被災地や飢えで苦しむ国を救い、宇宙食にもなっていることに感動しながら、ぼくはパンを味わった。

このパンの缶詰は簡単に開発されたわけではない。パン屋の秋元さんは何度も失敗した。真空パックの失敗、パンが缶にくっついて取り出せない失敗、ベーキングシートの失敗など。一年半にもわたり研究を続け、やっとのことで今の缶詰が誕生した。何度失敗しても、困っている人のためにうまくいくまで研究を続けた秋元さんを、僕は尊敬する。

「あきらめなければ失敗じゃない。でも、あきらめれば失敗になってしまう。」

「ミッション、パッション、アクション。この三つが人を動かす。」という秋元さんの言葉が心にひびいた。この言葉から、どんなことにも挑戦する勇気をもらった気がした。失敗してもあきらめなければいい。ぼくも秋元さんのように努力し続ける情熱をもち、目標に向かって行動できるかっこいい人になりたい。

さらに印象的だったのは、世界中の飢えで苦しんでいる人達を救う「救缶鳥プログラム」だ。このプログラムのすごいところは、買ってもらう利益だけを考えるのではないというところだ。賞味期限が切れる前に回収し、必要とされる国に送り、さらに空缶の再利用、鉄のリサイクルまで考えられている。まさに「入口から出口まで」がしっかり考えられているシステムだ。ぼくの家では、保存食の賞味期限が切れてしまい、捨ててしまったことがあるそうだ。ゴミになる前に食べればよかった。食べ物を無駄にしないこと、缶をゴミにしないことまで考えているなんて、秋元さんはすごい。ぼくは、本当の支援、本当のやさしさとはこういうことなんだと教わった。

パンの缶詰は、おいしさとみんなのやさしい思いを詰めこんだ、幸せをもたらしてくれる缶詰だった。秋元さんの夢を現実にする力。その力で町の小さなパン屋が世界を救うパン屋になった。どんなに夢を持っていても挑戦しないと始まらない。具体的に夢をえがいて行動することが大切だ。「あきらめなければ失敗じゃない。」この言葉を胸に、ぼくも秋元さんのように信念をもって生きていきたい。

（図書名『世界を救うパンの缶詰』）

〈講　評〉

秋元さんの生き方や考え方に感動していることがよく伝わってくる文章です。何度も失敗し、努力を重ねる秋元さんのあきらめない姿勢を支えたものは何だったのか。おどろくような数々のアイディアも、秋元さんの人を思う心から生まれ、それが本当の支援であり優しさであることによく気付くことができましたね。「さらに」「まさに」という言葉も、彩仁さんの思いを強調するのに効果的に使われています。段落のつながりも自然で大変分かりやすく書くことができました。

岩手県学校図書館協議会長賞（低学年）

海の小さなメッセンジャー

軽米町立晴山小学校　二年
古だて　とうわ

ぼくが、この本を読もうと思ったのは、

「このさかな、まぬけなかおしてて、かわいいね。」

と、お母さんがすすめてきたからだ。ぼくも、わらえると思った。でも、何か話しかけてるようにも思えて、とても気になった。

ぼくは、海がすきだ。おじいちゃんとつりにも行く。さいきんは、つれたさかなの名前をしらべたりもする。でも、自分がつりに行く海の中のようすまで気にしたことはなかった。このダンゴウオとであうことで、ひがし日本大しんさいごの海の中のようすをしることができた。

ぼくが、一ばん心にのこっているところは、しんさいごは、ダンゴウオしか見あたらなかった海に、ほかのさかながもどってきても、つなみでしずんだ生活ようひんはそのままだったしゃしんだ。生活ようひんは、人にとっては、べんりなものだけど、プラスチックはこまかくなり、海水にとけ、タイヤは二百年たたないとなくらなず、海の生きものにとってどくだという。ぼくは、海の中にタイヤやせん風きというようすに、きれいじゃないと思った。わざとではないけれど、どくをまいているのかと思うと、とてもわるいことをしているような気がした。ダンゴウオは、海は人のゴミすてばじゃないよって、うったえていたんじゃないかなと思った。

ぼくは、つりに行ったとき、トレーやビニールぶくろが海にういているのを見たことがある。そのときは、だれがすてたのかなくらいにしか思っていなかった。だけど、これからは、ごみは持ちかえり、ゴミを見かけたらひろえるところのものは、ひろおうと思う。ぼくができることはちっぽけなことだけど、ぼくの行どうを見てまねしてくれる人がいたら、ダンゴウオからのメッセージをひろげるだい一ぽになると思う。

（図書名『ダンゴウオの海』）

〈講　評〉

ふだんは何気なく見ていた透和さんの大すきな海。でも、しんさいの後の海の中は生活ようひんだらけ。透和さんがダンゴウオのくらしを通していろいろな問題点に気付いていく学びの様子がよく分かる文しょうです。

その上さいごには、透和さんがダンゴウオからうけ取ったメッセージを自分の行動を通して広げると書かれていました。心を動かしてくれる本と出合えて良かったですね。透和さんも「海の小さなメッセンジャー」です。

岩手県学校図書館協議会長賞（中学年）

かあちゃん取扱説明書を読んで

北上市立黒沢尻北小学校　四年
高橋尚生

この本の表紙、おもしろい！　ガミガミおこっているお母さんと、うるさがっているてつや。ぼくは、すぐに読み始めました。

てつやは、母ちゃんの作文を書きました。それは、母ちゃんの悪口の作文です。母ちゃんにばれそうな場面がありました。ばれないように、てつやとお父さんは男同士の約束をしました。授業参観が終わった時、先生に、

「作文を読めばよかった。」

と言われました。

いやいや、それはだめです。そんなことをしたら、すごくおこられます。きっと、ぼくのお母さんでもすごくおこると思います。

ぼくがなるほどと思ったのは、次の場面です。

てつや

「そういえばカズがね、カズのお母さんより母ちゃんのほうがすてきだって言ってたよ。」

と少しほめてから

「今日のご飯、何？」

と聞いたら、母ちゃんが、

「すきなのでいいよ。」

と言いました。てつやがよろこんで、

「ハンバーグ。」

と言ったら、その日のおかずは、大好物のチーズハンバーグでした。

こんなにかんたんに好きなものが食べられるなら、ぼくもやってみたいと思いました。

「ママの作るハンバーグ、世界一おいしいんだよね。食べたいな。」

と言えば、作ってくれるかもしれません。今度チャレンジしてみます。

てつやは、ハンバーグのことをきっかけに「かあちゃん取扱説明」を作り始めました。てつやのお母さんとぼくのお母さんは、にていると思いました。だって、説明書の中に、これは使える、と思ったところがたくさんあったからです。

てつやは、母ちゃんが働いているお店に行った時に、母ちゃんが、ビンをわってしまったお姉さんを

「失敗はだれにでもあるんだから。」

とはげましているところを見ました。母ちゃん、かっこいい！　てつやは、母ちゃんのことをますます好きになったと思います。

この本を読んで、家族は、お母さんを元気づければ、なかよくすごせるということがわかりました。そのためには、お母さんの気持ちをよく考えることが大事だと思います。お母さんがにこにこしていると、みんなもうれしいからです。

ぼくは、かあちゃん取扱説明書につけ足して書くことがあります。それは、ぼくのことです。ぼくは、わすれ物が多いので、わすれ物をしないように気をつけたいです。そしておこられる回数をへらしたいです。そうすれば、もっといいことが起こると思います。

（図書名『かあちゃん取扱説明書』）

〈講　評〉

主人公てつやの行動を読んで、自分だったらどうするのか比べながら感想をもつことができました。自分のお母さんのことも思い浮かべ、登場人物の行動や会話を楽しんで読み進めたことが伝わってきます。

本を読んでお母さんが大切な存在であることに改めて気付きましたね。尚生さんの素晴らしいところは、自分自身にも目を向けたことです。お母さんがにこにこ笑顔でいられるような取扱説明書になるといいですね。

岩手県学校図書館協議会長賞（高学年）

有言実行するには

宮古市立山口小学校　五年
佐藤心音（さとうここね）

「世界を救うパンの缶詰」この本の題名を見たとき、たしかに食料があれば亡くなる人は少なくなると思った。でも、世界を救うほどの力がパンにあるのか、しかもパンの缶詰って一体何？と疑問に思った。

この話は、パン職人の秋元さんが、阪神淡路大震災をきっかけにパンの缶詰を世界に届けていく話だ。私の住む宮古市も、七年前に津波による大きな被害を受けた。当時私は三才で、お店から食べ物が少なくなりインスタントラーメンを食べていたことを覚えている。この本を読むまで知らなかったが、東日本大震災のとき、岩手県にも秋元さんのパンが届けられていた。パンだと、水や火がなくてもその場ですぐに食べられる良さがあったからこそ、世界中にそして宇宙飛行士にまで喜ばれることができたのだ。また、糖尿病や食事制限中の人、食物アレルギーのある人などにも安心して食べられるパンだからこそ、有名になったのだと思う。

私は人からたのまれごとがあると、すぐに「いいよ。」とはなかなか言えなかった。また低学年のときは、自分から進んで行動することはあまりなかった。五年生になって、そんな性格を少しずつ変えてきた。運動会のときは、白組を何とかして勝たせたいという思いから、応えん団に立候補した。授業のときは、集中して話を聞き、書き、進んで手をあげた。グループの話し合いでも積極的に自分の考えを発表するようになった。市内水泳記録会では、リレーでアンカーになり、「無理かも・・・」とは言わずに全力で練習にはげみ、チームのために泳ぐことができた。そしてパン作りに何度失敗してもあきらめずに次へ次へと行動に移している秋元さんの存在を知り、今まで以上に「あきらめない」「進んで行動」「挑戦してみる」ことを意識し、最高学年に向けて行動で表していきたい。

東日本大震災のとき、地震のわずか一時間後に大津波がやってきた。大地震が来たら、まず机などの下にもぐる。その後、放送を聞いてどこにひなんすればよいかをできるだけ落ちついて考えたい。そんなとき、三年も保存できる秋元さんのパンのようなものを常備していれば、それを持ってひなんすることができる。ひなんした場所がどこであろうと、缶詰だとすぐに食べることができる。これで数日は生きのびることができる。家に常備しておくものを、もう一度家族で確かめたい。

ひなんするときの学校の合言葉は「自分の命は自分で守る」である。自分の身を守ることを第一優先としながらも、カップラーメンを食べていたときの自分とはちがい、大震災が起きた後のことを、具体的に考えられるようになった。秋元さんがパンを届けたそのあとのことも工夫していたように、一歩先のことを考え、自分のため、みんなのために行動していきたい。

（図書名『世界を救うパンの缶詰』）

〈講　評〉

この本との出会いによって、心音さんは防災に対する意識を高めることができましたね。自分の命は自分で守るために、これからどのようなことを心がけたいか、大変具体的に書かれてあります。まさに「有言実行するためには」という題名が示す内容の文章となっており、上手な題の付け方だなあと感心しました。心音さんは五年生になって、さまざまなことに挑戦（ちょうせん）し、自分を変えようと努力したのですね。秋元さんから学んだことを忘れずに、一生懸命（けんめい）学校生活をがんばってくださいね。

岩手県ＰＴＡ連合会長賞（低学年）

ひみつのきもちぎんこう

大船渡市立盛小学校　一年
さとう　まほ

わたしのきもちつうちょうは、くろコインもぎんコインも、おなじくらいかな。ともだちにもおねえちゃんにも、いじわるしてしまうときがあるし、やさしくできるときもあるからです。

かぞくつうちょうだったら、どうかなあ。あおコインがけっこうありそうです。ひかるくんとおなじように、わたしもおねえちゃんとけんかをします。だから、ひかるくんのきもちがわかります。けんかをして、おねえちゃんをたたいたり、たたきかえされたり、ないたりします。むかむかしてきます。そのうちに、おかあさんにおこられます。「なぜ、わたしだけおこられるの。」とおもうこともあります。

でも、ひかるくんのように、「かぞくにきらわれて、ひとりぼっちになったらどうしよう。」とまでは、おもったことはありません。そうおもったら、とてもかなしいだろうとおもいます。「もう、きょうだいげんかはしないようにしよう。」とおもうとおもいます。

どうぶつえんにいったときのひかるくんは、とってもやさしかったです。おとうとのともくんにぞうをみせてあげて、やさしいおにいちゃんでした。

「よかったね、ピンクコインがいっぱいたまって。」といってあげたくなりました。

わたしも、じぶんのいえのかぞくつうちょうにピンクコインがたくさんたまるようにしたいとおもいました。そのために、きょうだいげんかをしないようにしたいです。なにかあったときに、おねえちゃんのせいにしないこと、おねえちゃんもわたしもしんじることがだいじかなとおもいます。そして、かぞくにやさしくしてあげたいです。そうすれば、カラーンカラーンとコインのたまるおとがきこえるかもしれません。

（図書名『ひみつのきもちぎんこう』）

〈講　評〉

黒コイン、ぎんコイン、青コインにピンクコイン。気もちつうちょうにどんなコインが入るかなとじぶんの生かつやかぞくのことをしんけんに考えている真帆さんの顔が目にうかびました。しゅじんこうのひかるくんのこともはげますような気もちで読みすすめています。

この本を読んで、目には見えない気もちの音が聞こえるようになったかもしれませんね。

岩手県ＰＴＡ連合会長賞（中学年）

さくらの時間が止まったらいいな

北上市立黒沢尻東小学校　三年
渡邊未来

わたしは、「マンガでおぼえる百人一首」という本を読みました。その理由は、前から百人一首が何か気になっていたのと、大すきなヨシタケシンスケさんのマンガで百人一首をおぼえたかったからです。

この本は、百人一首をマンガを使って楽しく書いています。百人一首は、「わ歌」とよばれる歌が百こ集まったもので、今から八百年近く前、ずっとむかしに作られました。わ歌は日本の歌で、「五、七、五、七、七」の三十一文字で作られています。わたしがすきなはいくは「五、七、五」のリズムなので、にていて分かりやすいです。

わたしが心にのこったわ歌は、「花の色はうつりにけりな　いたづらに　わが身世にふる　ながめせし間に」（小野小町）という歌です。意味は、うつくしいさくらの花も、春の長い雨がふる間に、むなしく色あせてしまいました。わたしのうつくしさも、いろいろ考えこんだり心配している間に、すっかりおとろえてしまった、ということです。

わたしも、毎年同じような気持ちになります。わたしは、てんしょう地のさくらの花がうつくしくて大すきです。今年、わたしは、船にのってさくらの花をたくさん見ました。その時、こいのぼりを見て、「さくらの花のトンネルをくぐって楽しく泳いでいるのかな。」と、そうぞうしました。わたしも、さくらの花のトンネルをくぐりました。去年は、馬車にのってさくらの花を、たくさん見ました。その時、さくらの花がちっているのを見て、かわいそうだな、と思いました。さくらは、夏になると、緑の葉っぱになり、秋はこう葉して、葉が落ち、冬はついに何もなくなってしまい、さびしそうです。わたしは、「早く春になって、さくらの花がたくさんさいているのを見たいなぁ。」と思います。さくらの花は、さいている時はうつくしいのに、時間がたったり、長い雨がふると、ちってしまいます。さくらの花にずっとさいていてほしいのに、時間が止まったらさくらの花がずっと見られるのに。来年までさくらの花が見られないのはさびしい。さくらの花がかわいそう、と思います。

百人一首は、カルタのなか間と思っていたけど、歌だったとは知りませんでした。わ歌には、むかしの人の気持ちが、花や風けいなどを使って表されていました。自分とむかしの人の気持ちは、同じような、にたような所がたくさんあるんだなと思いました。わたしは今、百人一首のカルタで、まぜた読みふだから一まいめくって何番のわ歌のとりふだかを当てる遊びをして、カルタの練習をしています。これからも、むかしの人の気持ちをそうぞうしながらこの本をくり返し読んで百人一首をおぼえて、カルタが上手になりたいです。

（図書名『マンガでおぼえる百人一首』）

〈講　評〉

もともと俳句が好きだった未来さんにとって、百人一首は気になるものだったのですね。大好きな作者の本でもあり、興味をもって楽しみながら読むことができました。

和歌の意味に自分の経験を重ね合わせ、さらに深くその意味を考えることができました。昔の人の思いに心を寄せながら読んでいることに感心させられます。

これからも素敵な和歌と出会い、昔の人の思いにふれていってほしいと思います。

岩手県ＰＴＡ連合会長賞（高学年）

あきらめなければ失敗ではない

北上市立黒沢尻西小学校　六年
豊巻心路（とよまき　こころ）

私は料理をすることが大好きです。そんな私が缶詰と聞いて思い浮かべるのは、ツナの缶詰や甘いフルーツの缶詰です。私はこの本の題名にある「パンの缶詰」がとても気になりました。パンは作ってから日が経つとパサパサしたり、カビが生えたりしてしまいます。そんなパンをどのようにしてパンの缶詰にするのでしょうか。そして、そのパンが世界を救うというのは一体何を意味しているのか興味をもちながら本を読み進めました。

パンの缶詰が生まれるきっかけになったのは今から二十年以上前、六千人以上の尊い命が失われた阪神淡路大震災でした。「被災した人たちのために、何かしたい。」という思いでパン職人の秋元さんは被災地に向けて、たくさんのパンをとどけました。私も幼いときに東日本大震災を経験しています。幼い記おくながらも、数日間、食料を手に入れるのが難しく、家にあった食料を食べたことを覚えています。また、食料はあってもガスや水道が使えず、思うように調理できなかったことも覚えています。きっと阪神淡路大震災で被災した人たちも同じだったのではないかと思います。そんな中にあって、秋元さんがとどけたパンはすぐに食べられ重宝されたはずです。ところが、秋元さんが善意でとどけたパンの半分以上は食べられることなく、捨てられてしまいました。移動に長い日数がかかってしまって傷んだり、食べきれなかったりしたためです。せっかく被災地の人たちのためを思って作ったパンの半分以上が捨てられたことを知った秋元さんはきっとがっかりしたに違いありません。被災地の人もせっかくの善意を受けとることができなくて残念だったと思います。そこで、被災地から求められたのが、やわらかくて保存のきくパンでした。やわらかくておいしいことと、保存が効くことの両立なんて無理なんじゃないだろうかとわたしは思いました。秋元さんも最初は私と同じ思いでした。

でも、私とは違うところは、被災地からの声に耳をかたむけ、その難しいミッションに立ち向かったところです。秋元さんは何度も試行錯誤を繰り返し、パンの缶詰を作り上げました。思うように売上がのびずに苦労しても前向きにアイデアを出して乗り切る姿勢に私は感心させられました。秋元さんのアイデアの中で一番おどろかされたのは、中古のパンの缶詰を飢餓で苦しんでいる国へ送る「救缶鳥プロジェクト」です。むだなく、いろいろな人達のためになるアイデアも、困難に負けない強い精心がなければ生み出されなかっただろうと思います。私は秋元さんから、

「何事もあきらめなければ失敗ではない」ということを学びました。私は、小学校六年生です。小学校生活も残り少なくなっていきます。小学校生活最後の一年を充実させるために、どんなことも前向きに挑戦していきます。

（図書名『世界を救うパンの缶詰』）

〈講　評〉

大変すっきりとした構成でまとめ、分かりやすい文章を書くことができました。読み始める前に、本の題名からいろいろなことを想像するのは、読書の大きな楽しみですね。心路さんがわくわくしながら本を手に取ったことが伝わってきます。自分の経験を思い出したり、自分ならどう行動するかを考えたりするなど、自分を振り返り、比べながら書いているところも上手です。秋元さんから学んだ前向きな姿勢を、心路さんの学校生活に生かしてくださいね。

審査を終えて

第六十九回夏休み良書推薦運動読書感想文コンクールには、県内三十二の小学校から百十八名（低学年四十二名、中学年四十二名、高学年三十四名）の作品が寄せられました。今年は猛暑でしたが、たくさんの子どもたちが読みたい本を手に取り読書を楽しんでくれたこと、そして、自分の感じたことや考えたことを書きまとめ、このように多数応募してくれたことを大変嬉しく思います。保護者の皆様、指導してくださった先生方、ありがとうございました。

以下、今回の審査で話題になったことをお伝えします。自分の作品に当てはめて読み直してみたり、今後、読書感想文を書く時の参考にしたりして欲しいと思います。

まず、各学年に見られたよかった点についてです。

一、二年生の皆さんは、お話に出てくる人物の頑張りや発見、喜びや悲しみ等をすなおな気持ちで受け止め、共感しながら読んでいました。さらに、「自分だったらどう思うかな」「自分だったらどうするかな」と考えながら読み進めていました。そのように心と頭をたくさん使って読むことで、本の中から、これからの自分にプラスにしたい宝物をしっかり見つけ出していることが伝わってきて、素晴らしかったです。

三、四年生の皆さんは、自分に合った本を選ぶ力がついてきていることが感じられました。きっと普段から読書をたくさんしていて、本や図書館と仲良しなのでしょう。同じ本を読んでいても、感想を持つ視点が違っていたり書きぶりが違っていたりして、なるほどなあと感心させられる作品もありました。また、書きたい中心を決めて、自分らしさを文章にしっかり表現できているところも素晴らしかったです。

五、六年生の皆さんは、一冊の本を通して、自分自身や自分と関わりのある人、社会にしっかり目を向けていることが分かりました。登場人物に共感するだけでなく、本の内容から、書き手（作者や筆者）のメッセージを自分なりに受け止めているところに感心させられました。また、自分の思いを伝えるために、文章構成や書き出し等の表現を工夫して書きまとめているところが素晴らしかったです。

次に、さらによい作品にするために気をつけて欲しいところについてです。

①規定枚数（低学年二枚、中・高学年三枚）を意識して、文章構成を考えて書くことです。特に、中学年以上の皆さんは、「まとめ」の部分を意識して文章構成を工夫することで、自分の考えが読み手にしっかり伝わるようになると思います。

②書き終わったら必ず読み直すことです。誤字・脱字はないか、文と文のつながりが不自然であったり、段落と段落のつながりが不自然であったりしないかを、読み手になって確かめてみましょう。

③読みやすい鉛筆の濃さ、文字の美しさは、自分の作品をさらに輝かせてくれます。

皆さんの作品を通して、本の面白さ、読書感想文を書くことの素晴らしさを学ばせていただきました。ありがとうございました。

審査員　大渕　奈実